

連続講座
禅の歴史

— 第1回 —

鏡島元隆博士「禅学概論講義ノート」
の概要について

禅ブランディングプロジェクト
「曹洞禅とその源流」研究チーム

角田泰隆

鏡島元隆博士



かがみしま・げんりゅう

1912～2001

静岡県生まれ

駒澤大学仏教学部卒

1954年～仏教学部教授

「道元禅師と引用経録の研究」で
文学博士取得

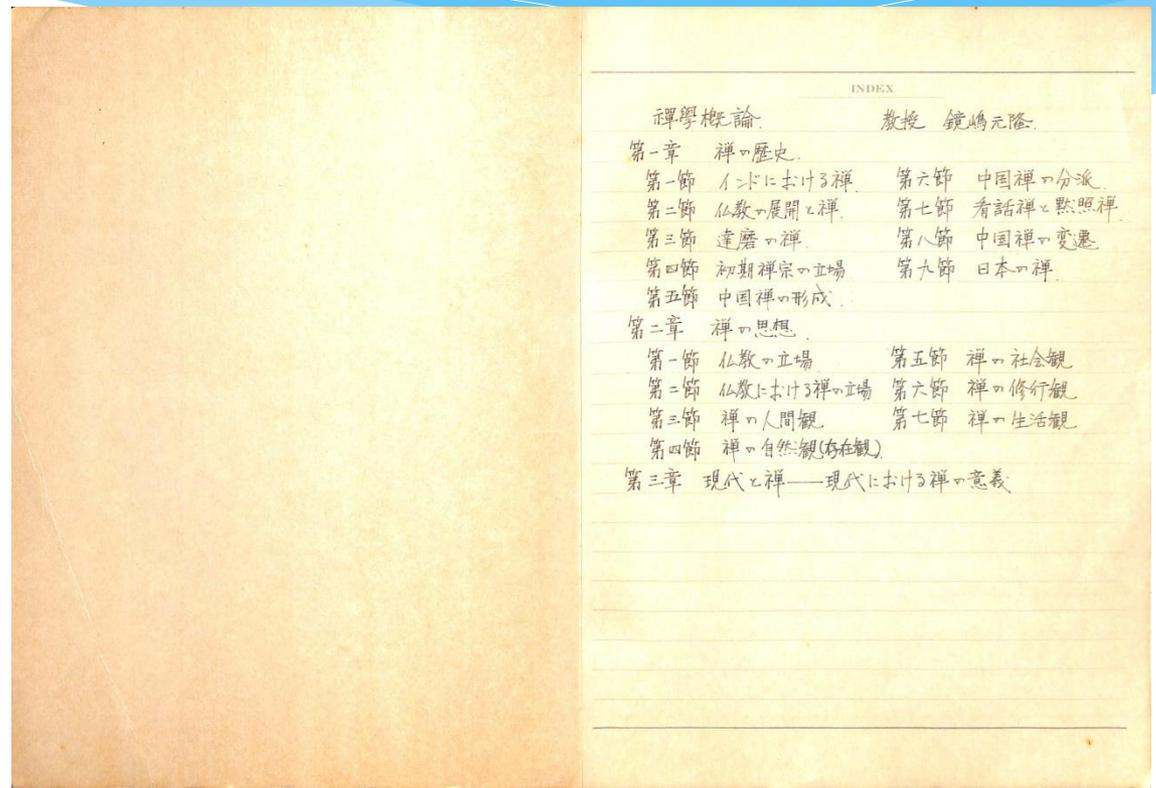
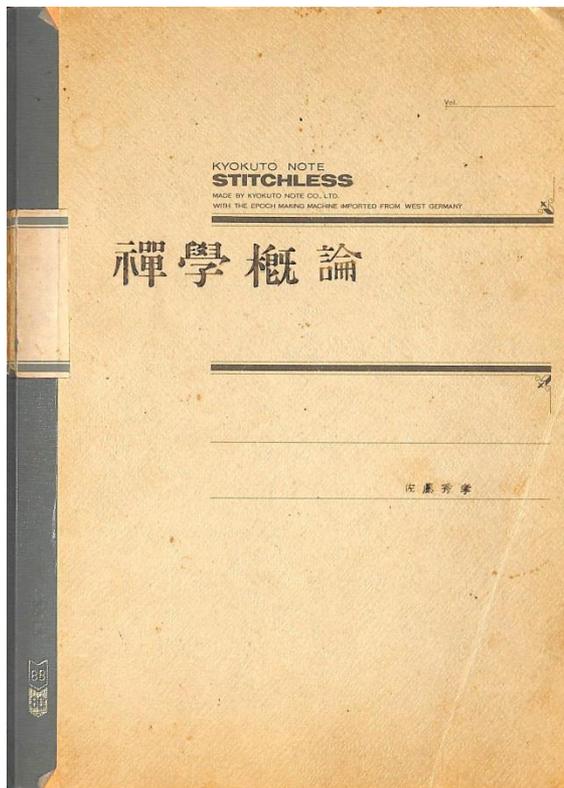
元曹洞宗宗学研究所所長

元駒澤大学総長

鏡島元隆博士「禅学概論講義ノート」

※現在、禅ブランディング事業webサイトで公開されている「禅の歴史」は、元駒澤大学総長、鏡島元隆博士(1912-2001)が、約40年前に仏教学部において担当されていた科目「禅学概論」での講義を当時授業を聴講した現仏教学部教員が筆録したものであり、その第1章(第2章は「禅の思想」)にあたる部分です。約40年前の研究成果であり、その後の学術的研究の進展において修正すべき点もありますが、これまで曹洞宗に受け継がれてきた伝統的な禅宗史を要領よく概説されたものです。インドの釈尊から日本の曹洞宗に至る伝統的な禅の歴史を知っていただくために、鏡島元隆博士「禅学概論講義ノート」(第1章 禅の歴史)を、ほぼそのままのかたちで公開しています。

鏡島元隆博士「禅学概論講義ノート」



仏教学部教授 佐藤秀孝先生 筆録 ノート
(Web公開では 同 奥野光賢先生 入力データを使用)

鏡島元隆博士「禅学概論講義ノート」

第一章 禅の歴史 第一節 インドにおける禅

禅という言葉は、インドの俗語 jhāna の最後の母音がおちて jhan と発音されたものの音訳である。jhāna は冥想・沈思・専念と訳されるから、禅という言葉も、冥想・沈思・専念という意味である。

禅は今日では、仏教独自の修行と考えられているが、元来は、仏教の修行に取り入れる以前から、インドにおいて一般に行なわれていた精神統一の方法である。インドにおいては、非常に古い時代から森林や木の下などに於いて静かに坐って、冥想に耽ることを行なわれていたのである。したがって、後に禅宗独自の修行とされた結跏趺坐・半跏趺坐も、その起源は、仏教の開祖釈尊にあるというよりも、さらに古く、インド一般に行なわれていた修行法であって、釈尊はこれを、仏教の修行に取り入れただけである。

インドのように一年中熱い国で、しかも三ヶ月間も雨季が続く国においては、静かに坐って冥想に耽けることは、その国に最も適した修行であったのである。

吉祥坐——手・足とも右が上……*インド人 右手が神聖。
降魔坐——手・足とも左が上……*禅宗

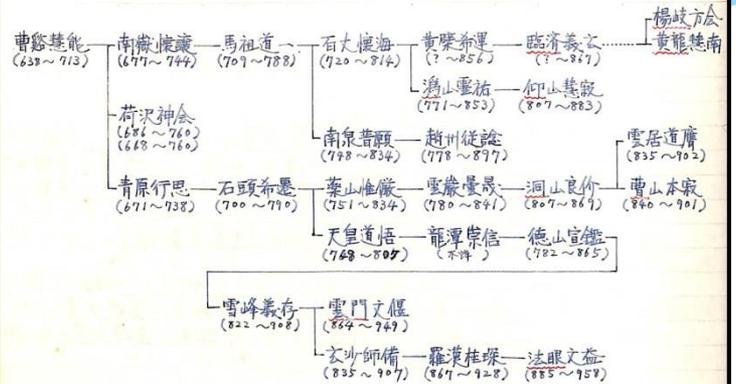
それでは、インド人は、何のためにこのような禅の修行をしたかという点、それは、インドでは、今日においてもそうであるが、一般に苦しい生活を管営しているためで、インド人は、この生活の苦悩から解放されるためには、絶対者となつたくなるより他にないと古くから考えられていたためであって、この絶対者となつたかゝる修行が、禅(坐禅)である。このような修行をインドでは yoga という。その修行を行なう人を yogin という。その完成者を muni と称した。

このヨーガの修行は、インドのいすれの宗教においても行なわれていて、釈尊も、インドの一般の宗教の修行の方法に従って、禅を取り入れたのである。したがって、禅は、元来、仏教独自の修行ではなく、インドの一般の宗教において古くから行なわれていた修行であったのである。

しかし、インドの他の宗教の坐禅と仏教の修行の坐禅とは、形式は同じであるが、その内容は、非常に異なるのである。

どういふところが異なるか、という相違点をあげると、第一に修行の目的が異なることである。

インドの他の宗教においては、何のために坐禅の修行をするかといへば、それは、天に生まれるためである。生天を目的として修行をするのが、インド一般宗教



五家の時代は、中国禅がその中国の特色を最もよく発揮した、いわば、禅の黄金時代であるが、この五家時代における禅の特色をあげると次のようになる。

まず、第一に、五家の禅は、經典や文字の權威から解放されたことである。禅における不立文字・教外別伝の護印は、すでに慧能によって掲げられていたが、これを最も強調したのは、五家時代の禅である。

五家の禅では、經典文字の權威が捨てられ、經典や文字は、月を指す指であるから、指を離れて、直接に月を見ること強調されたのである。

教家(天台) ← → 禅家
叔端從義(1042~1091)

禅宗者を無学として批判
達磨……藉教悟宗——二種入

五家の禅の第二の特色は、逆説的な問答が大いに流行したことである。五家以前においても、禅の指導者と学人との間に問答が行なわれていたが、それは、筋道の通った問答であったが、この時代になると、好んで逆説がもちいられ、いわゆる、木に竹を懸くような問答が行なわれるようになった。

鏡島元隆博士「禅学概論講義ノート」

目次

第1章 禅の歴史

- 第1節 インドにおける禅
- 第2節 仏教の展開と禅
- 第3節 達磨の禅
- 第4節 初期の禅宗
- 第5節 中国禅の形成
- 第6節 中国禅の分派
- 第7節 看話禅と黙照禅
- 第8節 中国禅の変遷
- 第9節 日本の禅

第2章 禅の思想

- 第1節 仏教の立場
- 第2節 仏教における禅の立場
- 第3節 禅の人間観
- 第4節 禅の自然観
- 第5節 禅の社会観
- 第6節 禅の修行観
- 第7節 禅の生活観

1. インドにおける禅

禅の語源

禅という言葉は、インドの俗語 **jhāna** (ジャーナ) の最後の母音がおちて **jhān** (ジャーン) と発音されたものの音訳である。**jhāna**とは瞑想・沈思・専念と訳されるから、禅という言葉も**瞑想・沈思・専念**という意味である。

禅の起源

禅は今日では、仏教独自の修行と考えられているが、元来は仏教の修行に取り入れる以前から、**インドにおいて一般に行われていた精神統一の方法**である。古くインド一般に行われていた修行法を釈尊が仏教の修行に取り入れたもの。

禅の目的

インドでは、当時、多くの人々が苦しい生活を営んでおり、生活の苦悩から解放されるためには**絶対者と一つになる**より他にないと古くから考えられており、この**絶対者と一つになるための修行**が禅(坐禅)であった。このような修行をインドでは**yoga** (ヨーガ) といい、その修行を行なう人を**yogin** (ヨーギン) といい、その完成者を**muni** (ムニ) と称した。

1. インドにおける禅

インドの他の宗教の坐禅と、仏教の修行の坐禅との相違
形式は同じであるが、その内容は非常に異なる。

①修行の目的が異なる。

・インドの他の宗教の坐禅(修行)・・・生天(天上界に生まれる)が目的。

インドの社会は、釈尊の時代も今日に至るも、貧富の差が著しく、民衆の多くは極端に貧しい生活を余儀なくされていたから、彼らは現世の幸福を諦めて、来世の幸福を願った。坐禅を修行すれば来世において天に生まれ、物質的な幸福が満たされると共に、超自然力を得ると考えられた。

・仏教の坐禅(修行)・・・涅槃を目的とする修行

仏教においては天上界は迷いの世界とされ、輪廻転生の迷いの世界から解脱する涅槃(煩惱の火を吹き消し苦痛のない状態に至ること)を目的とする坐禅に高められた。

②修行の性格が異なる。

インドの他の宗教の禅は苦行であるが、仏教の禅は苦行ではない。インドの他の宗教にあっては身体と精神を別々に考え、体を苦しめれば苦しめるほど精神は清められると考えたのであり、坐禅もそのための修行と考えた。したがって、仏教以外の禅修行者は苦行者であって、坐禅は精神を清めるために体を苦しめる苦行であるというのがインドの一般宗教の共通の考えであった。

2. 仏教の展開と禅

同じ仏教における坐禅であっても、約2500年の歴史の中で、インドから中国、日本へ伝わるにしたがい、その内容も展開する。

原始仏教的禅・・・現世において涅槃に達する方法として修行。

部派仏教的禅・・・涅槃が理想化され、普通の凡夫の修行によってはとうてい到達できない境地とされ、坐禅の内容や実践も複雑に、段階的に組織される。
まず自分の悟りを目指す。

大乘仏教的禅・・・部派仏教の坐禅が、まず自分の悟りを目指すの
にのに対し、大乘仏教の坐禅は自分と同時に
人々の悟りを目指す。
さらには自未得度先度他の坐禅を説く。

3. 達磨の禪

達磨・・・伝説上のダルマ

達摩・・・歴史上存在したダルマ

※ダルマの伝記は伝説に包まれ、史実と伝説が混在。

達磨は、南インドの人（南天竺国香至王の第三皇子）であり、西紀520頃、海路中国へ渡る。

北方の魏の国に赴き、洛陽の東の嵩山少林寺で壁観の坐禅を修行した。禅宗の伝承では、魏に赴く前に梁の武帝と問答を交わしたとされるが、歴史的事実ではないとされる。

達磨（達摩）の著述として『少室六門』があるが、この中、達磨の親説として認められるのは「二種入（二入四行）」だけである。

二種入には、後世の禅宗の標語である「不立文字、教外別伝」あるいは「直指人心、見性成仏」という主張は見られない。

達磨の『二入四行論』

二入

理入（知識）と行入（実践）

理入・知識から入る

行入・実践から入る（四つの実践）

報怨行・怨みに報いる行

随縁行・縁に随う行

無所求行・求める所無き行

称法行・法（教え）に称う行

4. 初期の禅宗

初祖 **達磨** インドから中国へ禅を伝える

二祖 **慧可** (487～593) 達磨に入門した中国僧。「慧可断臂」。

三祖 **僧璨** (?～606) 生涯、人を避けて世に隠れて修行。
『信心銘』を撰述。この頃までは**遊行生活**。

四祖 **道信** (580～651) 蕪州黄梅県の雙峰山の西山に住して、
門下500人を接化。**定住生活**が始まる。自給自足。

五祖 **弘忍** (602～675) 700人の門下。

『最上乘論 (修心要論)』を撰述。

★多くの門下を擁することになり、勤勞が始まり、坐禅の一行を重んずる修行から、**勤勞も坐禅同様に重要な修行**となる。

★500人から700人の僧が集団生活を営むようになり、禅宗独自の生活規則がつくられる。後に**清規 (しんぎ)**が成立する。

5. 中国禅の形成

六祖 慧能 (638~713) ・ ・ 中国禅の大成者

五祖弘忍の下、神秀の「北宗禅」と慧能の「南宗禅」に分かれる。慧能の宗風は、南方において頓悟を中心としたので「南頓」といい、神秀の宗風は北方において漸修を中心としたので「北漸」といわれる。

「南宗禅」と「北宗禅」の対立は、慧能の弟子の神会（じんね）が慧能を六祖と主張したことに始まる。神秀系統はその後振るわなかったのに対し、慧能の系統から多くの人物が輩出したため、禅宗の六祖とさえ、慧能を指すに至った。

6. 中国禅の分派

★六祖の門下では、南岳懐讓と青原行思が最もすぐれていたが、南岳の下に馬祖道一、青原の下に石頭希遷が輩出するに及んで、馬祖は江西で禅を広め、石頭は湖南で禅を振るった。

★後世、この二人の系統から臨済（りんざい）、曹洞（そうとう）、雲門（うんもん）、漚仰（いぎょう）、法眼（ほうげん）の五派が生まれ、五家（ごけ）と称されるにいたった。

★後に中峰明本は、五家の家風の相違について、

臨済は痛快、漚仰は謹厳、曹洞は細密、

雲門は高古、法眼は簡明、

と述べている（『山房夜話』）。

7. 看話禪と黙照禪

のちに五家の中でも臨済宗と曹洞宗が有力となる。

臨済宗＝看話禪（かなぜん）・・・大慧宗杲（1089～1163）

曹洞宗＝黙照禪（もくしょうぜん）・・・宏智正覚（1091～1157）

看話禪・・・公案の工夫

公案とは禪の悟りを直接端的に把えさせる方法として、古来の祖師によって行なわれた指導方法を類型化し、普遍化したもの。

黙照禪・・・黙々とし坐禅

黙々と坐禅することの中に禪の悟りがある。

8. 中国禅の変遷

唐代～宋代

「不立文字、教外別伝」

「逆説的な問答」 「直接行動で示す」

※禅は絵画・彫刻・書道などの芸術に対して独特な影響を及ぼし、儒教、特に朱子学の勃興にも影響を与える。

元代～明代

「念仏禅」

※浄土教が次第に盛んとなり、禅と念仏が合流して念仏禅となる。
この念仏禅を隠元隆琦が日本に伝える。

9. 日本の禅

日本における禅宗

臨済宗・曹洞宗・黄檗宗 の三宗
(鎌倉時代) (江戸時代)

- 臨済宗 ・ ・ ・ 栄西（日本に初めて臨済宗を伝える）
中国臨済宗の移植
応・燈・関の系統から白隠慧鶴（現在の主流）
- 曹洞宗 ・ ・ ・ 両祖（道元禅師と瑩山禅師）
中国禅の日本的展開
- 黄檗宗 ・ ・ ・ 隠元隆琦が明代の禅を伝来。
禅と念仏の兼修。